

# 郷土あはれ

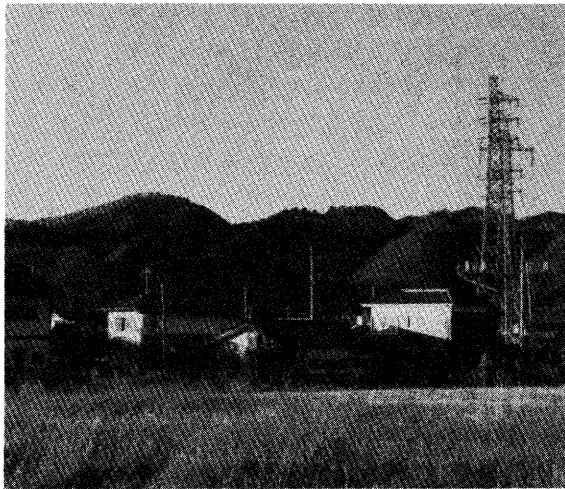
郷土館だより  
第9号

五日市町立  
発行 五日市町郷土館 東京都西多摩郡五日市町五日市920-1 電話 0425・96・4069 有線4607

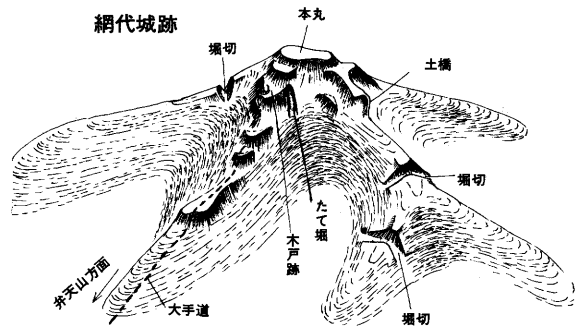
## 五日市の城 その二

じょうやま  
網代の城山の場合

中世城郭研究家 中田正光



北伊奈より網代城山を望む



網代城 城跡図 (前面北側)

### (1) はじめに

網代弁天山の南側に城山と呼ばれている山があります。その名が示すように、遠い昔には城が築かれていた山で、今日もなお、その跡を偲ぶことができます。

弁天山は春秋のシーズンになると遠足などでにぎわいますが、その隣りの城山では人っ子一人出会うことはありません。一度郷土五日市を探る意味で、城山に登ってみてはいかがでしょうか。昔を求めて歩くのも、時には新しい発見で感動することがあるかもしれません。

### (2) 地誌類の記録から

網代の城山について、今までどんな記録があるかみてみましょう。

江戸時代に書かれた『新編武蔵風土記稿』は、網代村

の項で、城山はその昔、遠見をするために築かれたものだろうと語っています。また別の高尾村の項では、大平山という山があり、この山は北条氏の家臣であった青木内記という者が二千石を領して築いた城であろうとしています。この『風土記稿』の説明では二か所に城があったように解されがちですが、同じ城山のことを述べたものです。次に『武蔵名勝図会』には、網代村に北条氏に仕えた貴志氏が住み、この城山を境とした隣り高尾村には高尾氏が住み、ともに天正18年6月、八王子城落城の際戦死者を出している旨が書かれています。つまり、城主はこの地に住んでいた貴志氏や高尾氏であろうと推定しているのです。昭和になってから書かれた『武蔵野歴史地理』はどうでしょう。小田原北条氏時代に貴志豊後守や高尾弥八郎、弥九郎が居城したとし、城山の麓にある弁天社は貴志島弁天とあって、その昔貴志氏が建立し

たものであろうと語っています。この記述の中で少し気になるのは、文中に貴志豊後守という名がみえることです。

実は、江戸幕府が作成した大名、旗本、下士たちの系譜『寛政重修諸家譜』という本にその名が明記されているのです。それによると、貴志豊後守の子である貴志兵部正成は、北条氏照（滝山城、八王子城の城主）に仕へ武蔵阿知路その他の領地を支配していたとあるのです。確かに貴志氏は相当古くから多摩地方に居住していた一族のようであり、特に五日市には来（木）住野、岸野、岸などという姓が多く、貴志氏の存在を裏付けているかのようです。

しかし、貴志氏が相当の勢力を保持し、網代あたりに居住していたとしても、網代城を築いたという証拠は何も存在しないのです。

この城は、いったい誰が、何のために築いたのでしょうか。この間に答えるものは、残された城跡の検討以外にないようです。

### (3) 築城の時期は

前回の「五日市の城戸倉城の場合」の中で、戸倉城の構造について詳述しました。その型は一城別郭に相当し、一つの城が二つの部分から成り立っており、相互援助の築城法を用いていると話しました。そして、その二つの部分は築城時期を異にし、一方が古く南一揆時代(15C頃)、もう一方が新しく後北条氏時代(16C)ということ述べたと思います。

網代城の城跡を検討すると、戸倉城の古い部分にきわめて似ており、網代城の築城時期もやはり南一揆時代に相当するのではないかと考えられるのです。

### (4) 南一揆とは

南一揆についても前回ふれておりますが、今回より詳しくお話ししましょう。

一揆というと農民一揆を連想しがちですが、ここで問題にする一揆は武士集団のことです。

もともと一揆という本来の意味は「揆（はかりごと）を一にする」、つまり心を一つにしてまとまるということで、農民の場合も、武士の場合もあるわけです。南一揆は農村武士（地侍）の集団です。

南一揆のほかにも、群馬の上州一揆や、千葉の上総本一揆、武蔵の武州一揆が世に知られています。

武州一揆とは、武州北一揆と南一揆の総称で、北一揆

は埼玉県の川越あたりを中心とした農村武士集団、南一揆は、秋川谷から南多摩にかけての武士集団と考えられます。

彼らの一揆には特定の統率者になる実力者が存在せず、ほぼ同程度の武士たちが集まった団体と考えてよいでしょう。ただ今日残る文書類から判断して、南一揆のリーダー格には、平山氏、小宮氏、梶原氏がおり、五日市在住の武士として、貴志氏（来住野氏）、高尾氏、網野氏、私市氏、青木氏、浜中氏、戸倉氏、土土田氏、小机氏、三内氏、宮本氏、萩原氏といった者たちがその構成員だったと思われます。

### (5) なぜ一揆は生まれたか

網代城や戸倉城が一揆の手によって築城されたとするれば、それではなぜ一揆は城を作ったかを考えなくてはならないでしょう。この問題について考えをすすめてみましょう。

15世紀の前半ごろから、関東地方の農村の中に、社会的変動が芽生えはじめていたのです。南北朝以来、いつ果てるともなく続く戦乱の中で、農民らは田畑を荒らされ、重税、労役（兵士として働く）などの苛酷な命令に従ってきました。

ここ武蔵（埼玉県・東京都・神奈川県の一部）は、室町幕府以来上杉氏の支配するところでしたが、上杉氏はたくま（犬懸家、山内家、扇谷家の四家に分かれ、互に勢力を競い合っていました。上杉家は関東管領でもあり鎌倉公方（初代は足利基氏）とも仲が悪く、衝突は避けられない政情でした。

上杉氏の内部抗争、上杉氏と鎌倉公方の抗争など、その戦乱の中にあって常に犠牲になるのは農民たちだったのです。農民たちにとって全く無意味ともいえる乱世の中で、自分たちの生活を守るための手段を考えなければなりません。彼らは同じ目的のために結集し、一団となって抵抗する行動をとったのです。

こうした農村の動きは急速に発展し、各地で領主に對する運動がみられるようになりました。たとえば米がいつもの年より豊作で大量にとれても、それを申告せず、自分たちの貯えとしました。こんなことができたのも、実は裏で糸を引く在地の指導者がいたからでした。その指導者が地侍と呼ばれる武士層の者たちだったのです。

地侍たちは、ふだん農業に従事し、事ある時は村内の農民たちを集め、武装することによって村の自衛にあたったのです。しかし一村だけの農民兵では安全を維持す

ることはできません。周辺の村々と結びつき、さらにその連帯を拓げることによって、大きな一揆へと成長していったのです。もはや単なる専業農民ではなく、武装した在郷武士団へと変わっていったのです。

## (6) 一揆の性格

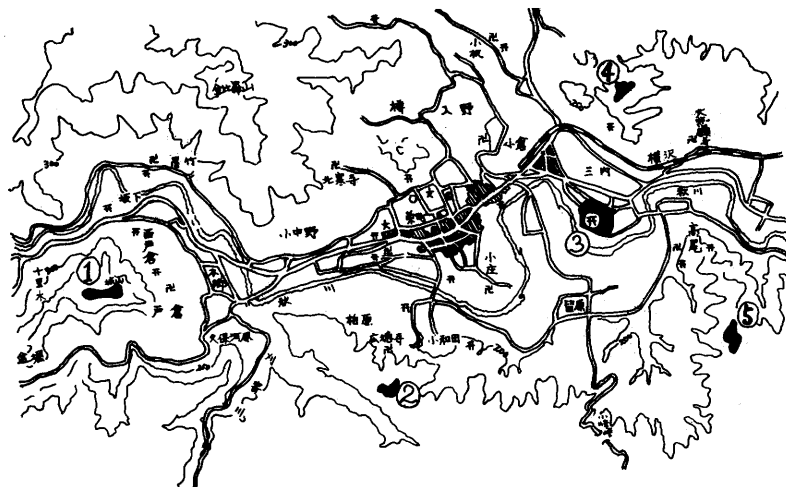
村内の農兵から大きく変身した地侍層による一揆は、重税や労役などの押しつけに対抗することは勿論、進んで自分たちの利益を求めて行動しました。彼らは大きな力に取り入り、恩賞を受けることを強く望んだのです。つまり、自分たちの生活権を守ると共に、利益を追求する集団となっていったのです。

『鎌倉大草子』には、一揆の行動が記されていますが、その行動は非常に浮動的であり、その時々状況に応じて味方になったり、はなれたりしています。一口で言えば変り身の早い集団でした。たとえば、こんな場合もありました。永享10年(1438)、二代目鎌倉公方の足利持氏は、室町將軍足利義教と対立し、永享の乱が勃発しました。この乱の時、南一揆は持氏と敵対関係にあった上杉憲実(のりざね)に味方しました。しかし、南一揆は、ただちに憲実の陣営に参じたのではなく、その時の力関係を巧みによみとり、最初のうちは憲実の城へ押し寄せるかの態度を示し、憲実の力が強力とみるとただちに四散して、その陣営に参じたのです。

こうした南一揆の行動は、古武士(鎌倉武士)のそれとはことなり、一人の主人に従ってあくまでも奉公するという性格のものではなかったのです。自主性に豊み、合理的に判断し行動する集団といってよいでしょう。

## (7) 一揆の築城

1. 戸倉城
2. 広徳寺  
うら山
3. 館谷
4. 阿伎留山城  
(天竺山)
5. 網代城



一揆が、その時々勢力の一方に取りついて軍事行動に参加する以上、時には自分たちも、あるいは自分たちの村も攻撃されることを覚悟しなければなりません。その時のために準備されたのが城なのです。

一揆が築いたと考えられる城は、比較的簡単な手法を取っており、極力自然地形を利用しようとしています。逃げ込み城のような消極性が感じられます。つまり、一揆の戦闘法は、村落内に攻め込まれた場合は、城にとじこもり、できることなら戦わずして援軍を待つというねらいがあったと考えられます。村の中に何か所もの城郭遺構(城跡)が認められるのはそのためで、一揆は分散して三十人から四十人程度の者たちが、いくつもの城にとじこもったようです。このような性格の城を「地域城」と呼んでいます。

五日市で南一揆に関係ありそうな城をあげますと、戸倉城、網代城、阿伎留山城(天竺山)、館谷、広徳寺裏山などが考えられます。村全体が城という構成で、その中の一つ一つは手足にすぎないのです。

昔、千早城にたてこもり数百の兵で、数万の大軍に対抗した楠木正成も、その周辺にいくつもの小城をもち地域全体を城郭化したうえで、ゲリラ戦を展開したのです。埼玉県川越あたりを中心に発生した北一揆の城も同様で、その殆どが数百メートルの間隔で、いくつも存在するのです。どの城をとりあげても、築城時期、城主など、一切不明です。

城主不明というのも当然なことで、一揆には特定の統率者、いわゆる殿様はいません。ですから一揆全体の労力によって築かれた城には城主名など残るわけがないのです。村のために、村人が作った、村の城だったからです。

## (8) 一揆と板碑

一揆の武士は、ことあらば合戦の先頭に立たされ、絶えず死に直面しており、常住、相当な覚悟が必要であったと思います。できれば安穏な日々の中で家族ともども食べていければと願ったことでしょうか、それが許されないのがこの時代の政情だったのです。その厳しさの中から彼らなりの宗教心が芽生えます。財を持った大名クラスの者たちは、寺院や塔を建立することによって心の寄りどころとしました。しかし経済力を持たない地侍たちにとってそれは夢です。そこで彼らは自らの供養塔を石で造ることによって寺院や塔を建立するのと同じ意味を表現したのです。これを「板碑」と呼び、緑色の秩父石でできています。

五日市町では、昭和49年に実施された板碑調査によって209基が確認されています。大変な数ですが実数はおもっとある見込です。この板碑の造立年代は、応永3年(1396)から明応3年(1494)まで知られており、正に南一揆の活躍期と一致します。苦悩に満ちた悲しい遺産といえるでしょう。

## (9) 網代城の遺構について

### (イ)保存状態

網代の城山は、秋川の南側に位置し、標高330Mの山頂は一段と高く、雄々しくみえます。山頂までの登り道は何本もありますが、当時はただ一本だけであったようです。山頂の本丸は長さ35Mほどあり、今は木立に包まれています。あたりを見まわしても何もありません。ただの平坦地となっているだけです。ここに物見の矢倉ものみやぐらが建てられていたのでしょう。

本丸から北側に向かって尾根続きとなるので、この尾根上を二か所で分断して侵入を阻止しようとしています。これを堀切ほりきりといいます。

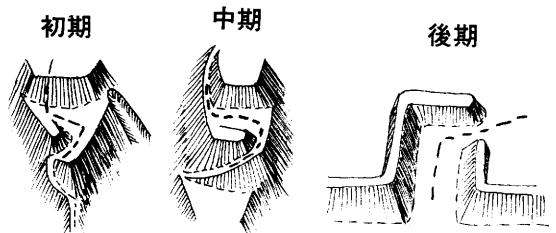
大手道(図を参照)方面は特に重要なので、数か所に平坦地(郭)を設けて武士たちが守っていたようです。これらの平坦地の中で、特に注意しなければならない木戸跡きとあとが一か所確認できます。

木戸跡は専門用語で「虎口こぐち」と呼ばれますが、この虎口の比較検討によって、南一揆時代の築城ではないかと思われるのです。

### (ロ)虎口(入口)の比較

城の入口は最も大事な築城の一つで、築城者が特に考慮しなければならなかったのです。

## ますがた こぐち 柵形虎口の発達



(網代城) (戸倉城) (滝山城)

網代城でただ一か所認められる虎口は初期柵形風虎口ますがたふうに相当し、これが進歩すると、戸倉城の柵形虎口となります。この柵形とは、入口を直角に曲げることをねらったもので、もし敵が侵入した場合は、この入口で敵の向きを変えさせるのです。そして、変化した時をねらって攻撃を加えるのです。

この虎口の作り方によってたとえば上杉氏、武田氏、北条氏、徳川氏の城を見わけることもできます。つまり戦国大名は、それぞれの戦い方がちがいで独特の戦闘法をもっていたことを意味しているわけです。

### (ハ)その後の網代城

網代城が南一揆時代の「地域城」の一つであり、逃げ込み城的な要素を持った城であることを話しました。

内部抗争を続けてきた上杉氏は、小田原城に拠点を置く北条氏によって、関東から追い出されてしまいます。上杉氏の後に北条氏の支配が始まるわけですが、北条氏は、一族、一門を関東に派出し、新たな支配体制を確立して行きます。

多摩地方に派出された人物が北条氏照じてるであり、八王子市の滝山城に居城しました。この時点で、南一揆は完全に自主制を失い、北条軍として再編成されてしまいます。つまり完全に一揆は解体するわけです。

南一揆の領地は新たな給地として与えられ、これを基に軍役(北条軍として働く)が義務づけられました。

このような状況下で、網代城は南一揆の城から、滝山城の支城しじょうとして、連絡用の「伝えの城つたえの城」に任務を変えていったのです。